「ドストエフスキイ研究会便り(20)」

「ドストエフスキイと親鸞」(2)

ドストエフスキイ、イエス像構成の足跡 ―ユダ的人間論とキリスト論―

芦川進一

- ★2017年3月、東京湯島の親鸞仏教センターで開かれた「現代と親鸞の研究会」に於いて、「ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡」というタイトルの下に提示させて頂いた「問題提起」と、続いてセンターの研究員の皆さんとの間で行われた「質疑応答」の記録を、前回から二回に分けて掲載しています。今回は後半の「質疑応答」の記録です。
- ★キリスト教と浄土教、ドストエフスキイと親鸞という東西の代表的な救済宗教とその代表的な思想家に於いて、どのようなことが基本的な問題とされ、また如何なる課題が存在するのか —— これらについて、私はこの「現代と親鸞の研究会」が二つの世界間の理解を深め合うための、小さくとも確かな一歩となったと信じるのですが、更にこの記録が、これら両世界に関して、皆さんが思索の糸口を得る契機ともなってくれればと願っています。
- ★古来、異国間でも異文化間でも、また異なる個人や宗教の間でも、「相互理解」ということは決して容易なことではありませんでした。私の「問題提起」も、まずはドストエフスキイと聖書世界についての未だ不十分でしかない理解を、親鸞仏教センターの皆さんにぶつけるという無謀な試みだったと言うべきでしょう。しかし研究員の皆さんは、日々親鸞と浄土教の世界に生きておられ、かつ研究所での研究に勤しんでおいでであるばかりか、ドストエフスキイとキリスト教への強い関心もお持ちの方たちばかりで、私の「問題提起」に真剣に耳を傾けて下さり、「質疑応答」も最初から熱気の籠ったものとなりました。しかもそこに展開したのは、決して難解な概念を巡る抽象的な宗教論議ではありませんでした。
- ★例えばドストエフスキイが描いた『罪と罰』のマルメラードフ。家族を貧困の極に突き落とし、娘のソーニャを売春婦の身に追いやってしまったこの酔っ払いは、自ら「どこにも行き場がない」と呻く地獄の底で、「最後の審判」の日には再臨のキリストが自分をも救ってくれることを夢見る存在です。この卑劣漢の生と言葉の全てが、「煩悩具足の凡夫」の自覚に立つ浄土教の皆さんの心にストレートに響き、ここから如何に熱い議論が展開したか、皆さんは驚かれることでしょう。これ以外にも「質疑応答」の場では、「父親殺し」や「神殺し」や「釈迦殺し」という、ドストエフスキイ世界と親鸞世界の奥底に共に存在する深刻な「罪」の問題や、それに対する「裁き」や「救い」の問題も取り上げられたのでした。
- ★キリスト教と浄土教の世界、ドストエフスキイと親鸞の世界という、本来時間と空間を大きく隔てて展開してきた二つの世界が、この先真の「相互理解」を果たすためには、まだまだ膨大な時間が必要とされることでしょう。巻末には《付記》として、この掲載が将来に向けた一つの踏み石となることを願って、四年後、「問題提起」と「質疑応答」を読み返して私が改めて感じたこと、また両者の今後の「相互理解」に向けて、どのような問題・課題が存在すると考えるかを記し、最後には、この日を契機として、新たに若い研究員の皆さんとの間で始まった「研究会」についても報告をしておきたいと思います。

後半 [質疑応答]

次	ページ
1 「質疑応答」 • • • •	
《付記》	
四年後、「質疑応答」を読み過	支して・・・・・・・・・・・・18
次回「ドストエフスキイ研究	会便り(21)」について ・・・・・25
前回・前半・	「問題提起〕
194 H	国次 ページ
	1 はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	2 聖書世界とドストエフスキイ世界 ・・・・・・5
	1. 「ロシアの小僧っ子」 ・・・・・・・・・・・6
	 2.「聖書世界」と「ドストエフスキイ世界」 ・・・・6 3.「ユダ的人間論」と「キリスト論」 ・・・・・・7
	3.「ユダ的人間論」と「キリスト論」 ・・・・・・7 4. キリスト教、聖書との取り組みについて ・・・・8
	3 ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡(1) ・・・9
	一『罪と罰』を構成する七つの要素一
	1.「痩せ馬殺し」の夢 ・・・・・・・・・・9
	2. 「ナポレオン理論」・・・・・・・・・・10
	3. 血の一線の「踏み越え」 ・・・・・・・・・10 4. 「行き場がない」ということ ・・・・・・・・11
	5. 「復活」ということ・・・・・・・・・・・11
	6.リザヴェータ、「神の救済の経綸」・・・・・・12
	7. ソーニャの「イエス像」 ・・・・・・・13
	4 ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡(2)・・・14
	ー『カラマーゾフの兄弟』、イワンの場合—
	1. 『カラマーゾフの兄弟』の基本構図 ・・・・・14
	2. 「ロシアの小僧っ子」イワンが凝視するもの ・・14
	3. 「大審問官」の劇詩 ・・・・・・・・・15
	4. 「地質学的変動」の人神思想 ・・・・・・・1 6
	5. イワンとゾシマ長老との対決・・・・・・・16
	6. スメルジャコフと父親殺し・・・・・・・17
	7. 「悪業への懲罰(カラ)」・・・・・・・・17
	8. 「死の床」のイワン、そして復活の光 ・・・・17
	9. イワンとは・・・・・・・・・・・・18
	5 討論のために
	イワンと阿闍世、裁き・・・・・・・・・・19 次回「ドストエフスキイ研究会便り(20)」 について・20
	NA - 12-1 - 22-11-11-11-11-12-12-12-12-12-12-12-12-1
	仏教センターから発行された雑誌「現代と親鸞」(第37号,2018)に掲げ
	スキイ研究会」とその「研究会便り」の趣旨を理解して下さり、この雑誌から(
	の方々には、心から感謝しています。 ままにさせて頂きました。 伊し教か所のまむについては、物策・格工をさせて

- ※転載にあたり、本文は雑誌掲載のままにさせて頂きました。但し数か所の表記については、加筆・修正をさせて頂 きました。「見出し」部分についても、より適した表現に変更したものがあります。
- ※本文に取り上げた作者の生没年や作品の制作年については、(かっこ)内に親鸞仏教センターの編集者が記して下 さいました。本文中の人名に付された(かっこ)内の肩書についても、同センターの編集方針によります。

[雑誌「現代と親鸞」・第37号・本文・p.86-p.107]



[質疑応答]

司会(飯島) まず「質疑応答」の下準備として、幾つかご確認させていただきます。『罪と罰』について七つの論点を挙げていただきましたが、主人公のソーニャと交流があったリザヴェータという女性が、思いがけない形で「キリスト論」的に重要な役割を担っていることをお示しいただきました。彼女はたまたま現場に戻ったがために殺されるという、本当に「何のために?!」という憐れな存在なのですが、実はソーニャと聖書を読み合う仲であったことから始まり、シベリアにおけるラスコーリニコフの復活に至るまで、この作品を底から支える救済の原理の象徴として描かれているということでした。このような構造がドストエフスキイのまったくの無意識の産物ということではなく、彼が聖書世界の確実な理解の上で、意図的な布石を打っているのであるともお話しいただきました。非常に納得せられるところでしたが、このような構造は、ドストエフスキイを専門的に読んでいる方たちも殆ど意識しておられないように思われるのですが、如何でしょうか?

芦川 私が聖書学を追うことで教えられたことは、聖書の世界とは「神様」とか「キリスト様」の話をただ「ありがたく」伝える書物ではなく、イエスという人間がどういう人間であったかということを、まずは福音書記者自身が本気で探って思索し、慎重に構成している書物だということでした。例えばマルコ福音書の特徴とは、あまり神学的なものではなく、主として人間的な角度からイエスをとらえているとされます。私もそう思います。しかしそのマルコでさえもが、イエスを「神の子」として提示しようとしていることは否定できません。「実にこの人は神の子なりき」(マルコ十五39)。これは十字架上で絶命したイエスを見て、ローマの百卒長が語る言葉ですが、イエスがヨハネから洗礼を受ける時、天から次のような声が響いたとされます。「なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悦ぶ」(同一11)。福音書の冒頭から始まって、終局の十字架に至るまで、マルコは人間としての端的雄勁なイエス像を刻みながら、「神の子」としてのイエスという「キリスト論」的キーワードを何度も配置しているのです。我々があまり深く考えずに「正典」「聖書」と言って神格化してしまっている福音書とは、「ユダ的人間論」のドラマと「キリスト論」的認識とを交錯させつつイエス像を刻み、そこから見えてくる「神」をとらえようとしているのです。先にもお話しましたが、私はこのような事実に気づかされて初めて、聖書に向かう姿勢が定まりました。

私に傲慢なことを言うつもりも資格もありません。しかし、例えば日本で出版されているドストエフスキイ作品の翻訳の多くは、少なくとも聖書やキリスト教に関する部分の訳は、みっともない珍訳、信じられない重大な誤訳が数多く存在し、しかも人気を得ているようです。多くの研究書や論文も然りです。明治から百年以上が経ちますが、この点ではまだまだ時間がかかるのではないでしょうか。将来の若者たちに期待したいと思います。

司会 聖書世界へ精通してゆくということが、先生のお話のすごく大きなポイントだと思うのです。例えば今のお話とイワンとの関係で言いますと、この「ロシアの小僧っ子」が重視する聖書の逸話で、ゴルゴタ丘に立つ三本の十字架とイエスとの話がありました。これは四福音書

の中でも、ルカ福音書で特に強調されているイエスの「善意」、あるいは「憐れみの心」の問題 かと思うのですが、これを「最も善意と憐れみの心を持つイエスさえも唾棄され否定される」 という「ユダ的人間論」の物語として理解し得ると考えるのは、如何でしょうか?

芦川 ドストエフスキイは非常に深くルカ福音書を読み込み、思索をしていますね。そのことはあの三本の十字架への注目によく現れています。イエスの両側にいた二人の罪人の内で、一方の罪人は悔い改めて救われるのに対し、他方はなおイエスを罵っている。人間の持つ両極性を見事に描いたルカの深みをドストエフスキイは受け止め、それをイワンに語らせるのです。この時のイワンは、罪を悔いてイエスに赦された罪人を凝視しています。そしてこの罪人を救う「キリストの愛と憐れみ」に感動し、彼は「ホザナ!」さえ叫びかかったのでした。しかし大事なことは、彼がこの「ホザナ!」を否定してしまうことです。その後イワンの認識はさらに深まり、「大審問官」の劇詩に至ると彼の焦点は、もう一方のイエスを罵った罪人の方に絞られたと考えるべきでしょう。つまりここでイワンは、イエスを裏切り十字架上で磔殺するのはすべての人間であり、「人間の内なる悪魔性」であるとするに至るのです。ドストエフスキイの「聖書熟讀といふ體験」を重視するのは小林秀雄(1902-1983)ですが、それと重ねてイワンの「聖書熟讀といふ體験」とその認識の深まりにも注目すべきです。

司会 イワンは近現代世界に通じる普遍的な問題を提示していると思うのですが、このイワンが近代的合理精神を徹底的に修めた哲学者として出てくる一方で、同時に「ロシアの小僧っ子」でもあるわけですよね。そして彼は、世界に目を向けるとこんなに多くの幼な子たちが虐殺されているとか、不条理や矛盾がこんなにも膨大にあるとかいうことを問題とし、最終的には「神はあるのか?」とか「神とは何か?」という問題を正面から問う存在として描かれています。このようなイワンには、「ロシアの小僧っ子」としてのドストエフスキイが、そのまま表現されたものと考えてよいでしょうか。

芦川 その通りです。我々はイワンという青年の思索の跡に、ドストエフスキイその人の思索の跡を重ねて読むべきだと思います。

法隆 『罪と罰』を構成する七つのテーマの内に「行き場がない」ということが挙げられていますが、私もやはり人は場所を求めて生きているのだなと思うことがよくあります。身近なことで言えば、「居場所」という問題です。その私が考えているものと、この「行き場」という言葉には通底するものがあるのでしょうか。

芦川 私は「行き場がない」というマルメラードフの言葉は、人間すべてに通底する普遍的な言葉であり認識であると思います。イエスはルカ福音書で言います。「なんぢら何を眺めんとて野に出でし。風にそよぐ葦なるか?」(ルカセ 24)。人間はこの地上に何のために生まれてきたのか、どこに行き場があるのか、―― このような存在の底から湧き出る問いこそ、根源的な宗教的問いと言うべきものでしょう。聖者ゾシマがイワンの内に見出したのも、この根源的な問いに苦しむ魂であり、だからこそ長老は、この青年が「高き天なる住まい」を見出すことを祈ったのだと思います。ドストエフスキイはその「行き場」を、「キリスト様」ですよとか「神様」ですよとかいう定式的な形で提示はせず、登場人物一人ひとりを「行き場のない」地獄に投げ込み、それぞれの「行き場」をそれぞれの苦しみの中から見出させる作家だと思います。

法隆 ラスコーリニコフに対して、ソーニャが「一緒に苦しみましょう」と言うのですが、その「一緒に」ということについても、合わせてもう少しお話しいただけますか。

芦川 ソーニャもまたまったく「行き場がない」存在で、このギリギリの窮境の底から、「すべてを与えて」十字架についたイエスを見つめる人です。「行き場のない」地獄をそのまま、彼女は「行き場」としたのですね。先に見た十字架の交換からも分かるように、彼女は殺人者ラスコーリニコフも「一緒に」十字架を負うことで、その「行き場」を見出せると信じていたのだと思います。

司会 マルメラードフという男は、娘に体を売らせ、その金で酒を飲んでしまうという、どうしようもない卑劣漢ですが、その「どうしようもなさ」というのは「もうどこにも行き場がない」ということですよね。自分で自分のことをどうにもできないマルメラードフという存在を、ドストエフスキイはその「行き場のなさ」「どうしようもなさ」そのままで、神に向かわせようとされたと先生はお考えなのですね。

芦川 はい。我々が自分の内を見つめてゆく時、行き着くのは「どこにも行き場がない」という認識でしょう。それは根源的な宗教的認識とも言うべきものですね。ドストエフスキイはこのことを、この「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生」そのものであるマルメラードフで徹底的に描こうとしたのだと思います。

青柳 そのことと関連するのですが、先生の配布プリントにある「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生」という言葉は真宗の言葉で、阿弥陀仏の救済対象を指す言葉ですが、私はこの「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生」そのものであるマルメラードフについて、わからないところがあるのです。マルメラードフは馬車に轢かれて突然死んでしまいますね。ところがこの作品には、マルメラードフ自身の救いがはっきりとは書かれてはいないような印象があるのです。先生はこの辺、どうお考えでしょうか。

芦川 それは「ラザロの復活」のテーマとも関係する、大切な疑問です。実はドストエフスキイはマルメラードフの復活を、ソーニャの心の眼に映し出される形で書いているのです。これは先に言及しませんでしたから、ここで簡単に説明させていただきます。

マルメラードフの死骸が夏の暑さで腐り出してしまいます。ゾシマ長老も「聖者」と言われながら、死後すぐに腐臭を発して大変な醜聞が生じるのですが、「腐臭」とはドストエフスキイにとって、「死と復活」についての象徴性を担う大テーマです。マルメラードフの死骸が発する腐臭に他の住人たちが文句を言い出し、やむなくソーニャは父の死骸を墓地の霊安所に運び出します。それから彼女がしたこととは「仕事」に出かけることでした。客を引くために街頭に立ったのです。家族を養うべく「すべてを与えて」生きるのがソーニャなのです。そしてこのソーニャが街角で、父マルメラードフが歩いている姿を見かけるのです。

私は、この場面が一体何を意味するのか長いことわからず、彼女の心眼に父の復活体が映し出されたのだと納得したのは、相当時間が経ってからのことでした。ドストエフスキイは「復活」という大事件をこのような形で描くのです。うっかり読んでいると、まったく訳がわからないままに、取るに足らないような決定的なことが起こっている。聖書的磁場を今に刻む、ド

ストエフスキイのリアリズムの筆です。

青柳 そうなりますと、マルメラードフという存在は、救われる側というよりは、むしろイエスの側の、「救いの働き」の一端というような感じがしてしまいます。すごく真宗的な用語になってしまうのですが、要は衆生を導く側の諸仏であるとか、善知識であるとか、そういうような「働き」のことになってきて・・・。ドストエフスキイは、マルメラードフという存在を、彼自身が救われるというよりは、人間の救いを明らかにするために書いたということなのでしょうか。

芦川 「救いの働き」というとらえ方もできるとは思いますが・・・。マルメラードフはソーニャの心に、愛情の眼に掬い取られ、死を超えた永遠の生命として映し出されたのだと思います。つまり彼が夢見ていたように、再臨のイエスが栄光と共に到来し、「豚どもよ、来い!」と呼んでくれるというような、定式的な「救済の経綸」の枠の中ではなく、彼の復活はドストエフスキイの独自のリアリズムによって描き出されたのです。マルメラードフは全くの「凡夫」のままで、そのまま救われるのです・・・。うまくお答えできずに済みません。

青柳 有難うございます。真宗の側に持ってきてしまって申しわけないのですが、『観無量寿経』という経典の中に韋提希という女性が出てきます。この人は「凡夫」であるというふうに言われるのですが、それを親鸞は「権化の仁」であるというように言い表します。 韋提希が「凡夫」であるということにおいて、阿弥陀仏の救いの働きというものを、ある意味証明したのだというような言い方をしてくるのです。 そういうような立場にマルメラードフもいるのかな、というような意味でお聞きしました。

芦川 そういう「救いの働き」、「救済の経綸」の中に位置づける見方からすれば、マルメラードフもそのように位置づけられることは否定できませんが・・・。

中村 マルメラードフの復活のことで、青柳さんの続きでお伺いをしたいのですが、彼がソーニャの内でそのように復活するというのは、よくわかります。しかしマルメラードフの救いは、日常の生活の中になかったのか、この点はどう考えたらよろしいでしょうか。

芦川 彼はまったくの絶望の内に死んでゆきます。しかし一方で彼は「行き場のなさ」の只中で、神の、そしてイエスの救いを信じてもいたのです。そして事実その通りになったのではないでしょうか。 マルメラードフの死を超えた永遠の生命は、娘の心の眼にしっかりと映し出されるのですが、それは彼女の働く街角において、彼が歩む姿のままでのことなのです。 ——このような視線から復活を具体的現実の内に捉えて刻むのが、ドストエフスキイのリアリズムの筆です。このような捉え方は、皆さんにはズレた感じがするでしょうか。

青柳 そうですね。マルメラードフに関しては、私の印象としては少しズレがある感じがします。マルメラードフは、結局最後の審判の時に「豚どもよ、来い!」と言われ、自分たちも救ってもらえるということを口にしますね。その点において、神の救済というものをある意味で「私有」しているような感覚が私はあります。親鸞は多分そういう言い方はしないのではないのかな、というような印象が私にはあるのです。また「マルメラードフ」が「甘ったれ」とい

うような意味の名前だということを初めて知ったのですが、自分自身を見つめるということに 対して、また自分自身の救済に対しても、彼には「甘ったれた」面があって、その点において マルメラードフとは絶対救われない存在だとして、ドストエフスキイは書き切ったのではない のかなと、最初にお聞きした時に思いました。

芦川 その「甘ったれさ」「どうしようもなさ」を、ドストエフスキイは見事に極限まで書き切ったのではないでしょうか?「甘ったれた」「どうしようもない」「凡夫」が、なお救われたいという願いを持って生きている、ここにドストエフスキイの人間観察の凄いところがあると私は感じるのですが。

青柳 それはわかるのですが、その「どうしようもなさ」というのは、むしろ神というものを、 救済というものを望みながらも、その神の救済というものをどこまでも自分の願望の中に取り 入れていってしまう、「私有する」というようなところまで、その「どうしようもなさ」という ものをドストエフスキイは書いたのではないか、このように私は読んでしまったのです。そこ まで読むのは、深読みし過ぎなのでしょうか。

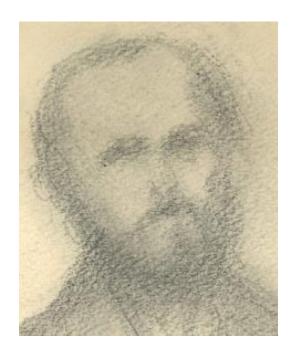
芦川 お互いに違ったことを言っているのではないと思うのですが・・・。このズレを私はおもしろく感じています。ところで「救いを私有する」ということですが、「キリスト論」と「ユダ的人間論」との関連で言いますと、すべては神の救いの中にあるのだという「キリスト論」的な視野から見れば、マルメラードフ的な救いへの希求は、なるほど否定的に見えてしまうかもしれません。しかし彼の在り方は、やはり「ユダ的人間論」から見るべきものでしょう。ドストエフスキイは救済の確かさ、「キリスト論」を誰よりも一番よく知っていながら、敢えて「ユダ的人間論」の場に立ち続けた人であったように思います。深いところから見れば、すでに向こうから救われている。しかし「どうしようもない」「行き場のない」地獄の中にいる人間にとっては、「私有」も何もない、救われる構図などとても見えない、救いへの必死な希求があるのみだ、ドストエフスキイはマルメラードフをこのようなところに追い込んだのだと思います。

中津 今問題になっておりますマルメラードフについて、先生が『ゴルゴタへの道』(2011) においてこう書いておられます。

「親鸞とドストエフスキイ、彼らが我々に教えることは、あらゆる時代にそれぞれの「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生」マルメラードフが満ちていること、そして畢竟の所、この我々自身がマルメラードフに他ならないという事実である。この内なるマルメラードフの自覚こそ、我々が遥か彼方からの超越の声、大慈大非の心を感受する絶対的な条件であろう」(82頁)

これは大変大事な表現だと思います。我々自身がマルメラードフに他ならないという事実、 ここが、ドストエフスキイが親鸞と非常に重なり合うところではないかと感じるのです。

芦川 結局、我々の認識は「自分はマルメラードフだ」というところに行ってしまうのですね。 ここからすべてが始まるのだという・・・。他人を「こいつ甘ったれだ!」とか、「どうしよう もない奴だ!」という倫理的批判は幾らでもできます。しかし結局は「自分はマルメラードフ なのだ」という認識に戻らざるを得ないのです。





死の家から出てきた男(小出次雄 画)

鏡御影 (西本願寺 蔵)

中津 我々自身がマルメラードフであるということを、親鸞の教えの受け取りと重ねてみたいと思います。親鸞は本願の救いに関して「十方衆生の救い」ということを言います。「十方のあらゆる人々の救い」ということですが、その「十方衆生」というのは「十方の万の衆生」であって、「すなわちわれらなり」。このような言葉があるわけです。マルメラードフが自分自身であるという受け止め方ができるのは、あらゆる問題を抱えている人々を、他ならぬ我々の問題として受け止めることができるということで、ここには人間をとらえる非常に広く深い地平が開かれてくるのではないかと私は考えます。

今の時代はどうしても自分の善、自力というような考えが強いですから、我々自身の世界が狭いと、人間同士が対立することになってしまいます。そこには人間の立つ地平の相対的な限界があると思うのですが、阿弥陀仏の世界に触れた時、初めて相対の世界が我々の世界として受け取られると親鸞は表現しています。そういう点で、マルメラードフが我々自身であるということは、大変大事なことを示して下さっていると思いました。

芦川 ドストエフスキイが教えてくれることは、この認識をさらに煮詰めてゆくと、結局我々はマルメラードフであるばかりか「ユダ」である、つまり我々は皆、キリストをも裏切って殺してしまうユダであるという認識にまで行き着くということです。これが『カラマーゾフの兄弟』においてドストエフスキイが、イワンにおいて煮詰めた認識です。

田村 先生、今日はありがとうございました。チャップリンには演じてみたい人物が三人いたそうです。キリストとナポレオンとヒトラーです。彼は結局三番目の男しか演じなかったのですが、私は大学に入って、せっかく大学生になったのだからロシア文学でも読もうという気持ちになって読み始めたのですが、本当にわかりませんでした。その理由を考えて、西洋というのはナポレオンとかキリスト教とかでできているからだという結論に至りました。つまり文化・宗教が違うからだと。

それでも二点質問させてください。私はドストエフスキイが好きで、『罪と罰』や『悪霊』や『カラマーゾフの兄弟』などを読んできました。ところが今日の研究会のように聖書、「キリスト論」「ユダ的人間論」などを踏まえ、イエス像探究の足跡としてドストエフスキイを読まねばならないとされますと、じゃあ自分は一体何を読んできたのだろうか、何に感動したのだろうかと、自分に疑問が出てくるわけですね。

文学を味わう時、そのような知識ではなく、私は、ああおもしろいなと感じることが大切だと思うのです。その時に学問的根拠が大切で、イエス像なり聖書学というものを踏まえなければ誤読になるのであれば、では自分はドストエフスキイを読めるのかという疑問が湧くわけです。これは恐らく私のみならず、キリストに関心のない多くの日本人が共通に感じることだと思うのですね。つまり、バックボーンが違う我々日本人が、果たしてドストエフスキイを読めるのかという問いです。

もう一つは、それでも明治以降の日本でドストエフスキイが読まれてきたのは、宗教とか文 化のバックボーンは違っても、その奥にはやはり何か我々を引っ張る力があるからだろうと思 われるのです。先生はこのことについてどのようにお考えになるか、教えていただきたいので すが。

芦川 ドストエフスキイを、私が先にお話したような角度から読まなければいけないというような、そんな絶対的な命法などはないと思って下さい。ドストエフスキイは人間観察が非常に鋭く深い人で、この人間観察の深さを味わうだけでも本当に楽しいし、恐ろしかったり悲しかったり、それだけで充分にエンジョイできる世界です。

「ドストエーフスキイの会」という、もう半世紀近く続いている会があります。ドストエフスキイの愛好者と専門家の方たちが集まって、一カ月ごとに作品の講読をし、また色々なテーマで講演や討論をする会で、私もそこに時々出させていただくのですが、この会の方たちは私がお話をすれば、その内容に熱心に耳を傾けて理解して下さるのですが、普段は私と同じ読み方をされているわけではありません。酔っ払って「俺はやっぱりマルメラードフだ!」と叫んだり、眼を輝かせて『悪霊』を論じたり、ここで出会うのは、ドストエフスキイを生きておいでの方たちです。私はそれでもう充分だと思います。

私自身は自分の性格とか色々な機縁で、「死を超えた永遠はあるのか?」というような問題から入って、ドストエフスキイに対してどちらかと言うと「求道的」な向き合い方をしているのかと思います。今日お話したようなところで読まないと、私は何か落ち着かないのです・・・。繰り返しとなりますが、ドストエフスキイとの取り組みで、決してこれでなければならないというような規範はありません。

田村 私は作中に出てくるフレーズが本当に好きで、例えば『罪と罰』であれば、冒頭の方で ラスコーリニコフが「結局、人間が恐れているのは、新しい言葉なのだ」とか、また『カラマ ーブフの兄弟』では「確かに私は精神に病があるかもしれません。しかしこの時代、精神に病 がない人間がいますか?」、このような言葉があります。時代は違っても胸に突き刺さってくる ところが面白いのですね。だから読まずにはいられないというか・・・

先ほどの「行き場がない」ということでも、もう十数年ぐらい前のことですが、世界の十五歳以下の少年少女が、今どういうことを最も強く感じているかという調査があったそうです。「自分は、アウト・オブ・プレイス」、「場違いな所にいる」と感じる若者が一番高い率を占めたそうです。マルメラードフの問題とは、決して抽象的な文化概念などではなくて、現実の人間の胸に突き刺さる問題で、こういうところがやはりドストエフスキイの本当におもしろいところだと思いながら、私は読んでいます。

しかし私も仏教の本を読んでおりますので、当然「救い」という問題は気になり、その時今日の先生のお話のように、キリスト教の高い知見を持って読むドストエフスキイと、知識なくして読むドストエフスキイとは、どこが異なりどこが同じかというところが、やはり関心の対象になるというか、問題になると思いましたので、先ほどのような問いになったわけであります。ありがとうございました。

長谷川 私も同じような質問になるので、うまくお話しできるかわからないのですが、少し角度を変えて質問させていただきたいと思います。

私もドストエフスキイは若い時に読んで、それこそ徹夜をして読んで、面白いなと思いました。今日先生が最初に、ドストエフスキイとどうして出会われたかのお話をされ、またその後どうしてもキリスト教という背景を解明される必要があると感じられた話をされ、非常に感銘を与えられたのですが、その一方で私が思ったことはこういうことでした。恐らくドストエフスキイを読んでおもしろいと感じる部分と、その先にあるキリスト教の枠組みを知る必要というのは、たぶん最初は分けられないのではないかということです。二つの要素が不可分にあるからこそ、おもしろく読めるのではないかと。

私がなぜこういうことを気にするかといいますと、私は元々西洋哲学を勉強していまして、その過程でキリスト教の、専門とまではいきませんが、勉強もしていました。最初はおもしろく読んでいたのですが、ずっとやっていくうちに、自分との距離をだんだんと感じるようになったのです。西洋人が哲学を、例えばフランス人が哲学をやりますね、私はこのフランス哲学をやっていたのですが、彼らはユダヤ・キリスト教の伝統の中でもやっている、さらにまたそれ以前のギリシャ哲学の伝統も踏まえてやっているのです。それを向こうにして自分は勉強をするのですが、やってゆく内にだんだんと距離を感じるというようなことがありまして、今はなぜか日本の哲学などを勉強するようになっています。

芦川先生はずっとドストエフスキイを研究されてこられて、たぶん、最初は死後の生というような問題との関わりで始められ、やはりそこにはキリスト教という問題が核にあるということを自覚されたとのことです。先生は最後までキリスト教の枠組みに沿ってゆかれるのか、どのような形で最終的なところで関わられようとしておられるのか —— この辺のことをお伺いしたいと思います。

芦川 私の場合、単純です。最初はこうでした。イエスについて、あれほどドストエフスキイが言うのだから「何か」があるのだろうと、イエスに目を向けていったのです。その内に段々と焦点が合ってくる。そして驚きました。「イエスという人は、何て奴だ、大変な人間がいたのだな!」―― 下品な言葉を使いましたが、このような出会い方をし、その驚きが今も続いていて、ドストエフスキイを介しイエス像の構成を試みることが続いている、そしてこれからも続くだろう、このようなことです。

『アンジャリ』(第33号) にも書かせていただきましたが、ドストエフスキイのイエス像の構成ということでも、私は彼の出発点は、イエスをわずか六つの形容詞で表現したところにあると思っています。シベリアからフォン・ヴィージン夫人に送った手紙の中で、

「この人間ほど美しくて、深くて、魅力的で、理性的で、男性的で、完全なものはない」

彼はこう記しています。本質的なところで対象を掴んで、具体的に表現する人なのです。そこには何のドグマも宗教・文化の伝統もなく、ただ対象に向ける素直な眼があるだけです。その眼がイエスに対しても向けられたのですね。キリスト教二千年の歴史の底には大変な伝統と制度が、そして知識や思想の集積が横たわっていることは事実です。しかしやはり原点は一人ひとりが、自分自身のイエス像を構成してゆくことだと思います。イエスについて、「この人は神だ」と言う人もいれば、「そんな馬鹿な、人間だ」と言う人もいれば、シベリアのドストエフスキイのように六つの形容詞で表現する人もいます。それでいいのだと思います。

私は自分が学ぼうとするものからすれば、本来は露文科とか西洋古典学科へ行くべきだったのでしょうが、比較文学・比較文化学科を選びました。自分を専門に限定せず、できるだけ自由なところに身を置こうと思ったのです。現在の大学は専門化が進み過ぎてしまい、「神はあるか? 不死はあるか?」という本質的なことに取り組むもうとする若者がいても、正面から相手をしてくれる、また相手のできる教官がまず見当たりません。これは日本人全体のメンタリティの貧困化を象徴するものだと思っています。今のご質問に対するお答えとなるでしょうか。

長谷川 よくわかりました。今のようなお話はすごく納得できるのですが・・・、ただ先生が提示された「キリスト論」は、非常に特殊なテーマのようにも思われるのです。たぶん先生は、「キリスト論」とはドストエフスキイの理解だけに限定されるものではない、人間や世界を理解するために必要な視野であるとしてお話をされたのだと思うのですが・・・。最終的には誰にも「キリスト論」が必要だとしても、自分自身はイエスの福音というものを聞き取れるか否かという問題が出てきてしまうのではないかと思ってしまうところがあり、このような質問をさせていただきました。

芦川 できればこれを契機に、親鸞聖人に向かうのと同じように、「イエスという人物は何だろう?」と好奇心をもって聖書に触れてゆかれると、自分自身の世界と照らし合わせて、興味も出てくるのではないかと思います。

親鸞聖人をこれだけ本気で研究されている方たちが ―― このことだけで私は圧倒されているのですが ―― 自分の専門からは遠く離れて見える聖書世界にも触れてみようと、一歩自分を違うところに置いてみると、きっと何か新しいものが出てくるように思います。西田先生も「内在的超越のキリスト」とか「内在的なる絶対愛の神」という概念と共に、浄土教とキリスト教の両者が、しかも親鸞とドストエフスキイの両者が、将来の宗教的思索にとってこのうえなく重要な役割を演じるであろうと記され、我々に一歩先に踏み出すことを促されています。

この西田先生のゼミでは、普段カントやヘーゲルの原典講読をするのですが、そのために聖書や仏典、ドストエフスキイやトルストイ、ゲーテやボードレール、そしてベートーヴェンなどに親しむことが不文律の前提とされていたそうです。小出先生もよく言われていました。「君も心をさらに広く開けて、さまざまな一流の先哲と取り組むのだ。そのためには時間をかけろ。六十歳になるまでは生意気なことは言わず、ひたすら基礎作業だ」。この姿勢で、ゆっくりと時

間をかければよいのだと思います。

司会 今の田村さんや長谷川さんからのリアクションも、ドストエフスキイ世界や西洋哲学が持つ理解の困難さから言えば、私には多くの方がされる率直で自然なリアクションのように感じられるのです。ただ、芦川先生のお答えも自然なものと感じられるのですね。というのも、先生はキリスト教とはもともと無縁で、聖書に触れてもよく分からなかったという事実があったからこそ、ドストエフスキイを介してイエスという人と取り組む内に、イエスの生と死が持つインパクトを心に素直に受け止められたのではないかと。

その点については、イエスに関する知識を集積した大変な学問として聖書学があり、またドストエフスキイも、イエスという存在を六つの形容詞で見事に表現したと思うのですが、たとえそうだとしても、イエスという存在のすべてが解明され切ったわけではなく、なお解き得ない謎は多いのだということですよね。このことを誰よりも深く理解していたのがドストエフスキイで、それを彼は自分の文学世界において「イエスの十字架とは何であったのか?」とか、「イエスを死に追いやった弟子たちとは何であったのか?」とか、さらには「復活とは何であったのか?」、このような具体的で本質的な問いを問い続けたのでしょう。そしてこのドストエフスキイの問いを、芦川先生も引き受けようとされたのではないか、改めて自ら問い直そうとされたのではないか —— そう考えたのですが。

芦川 それは買い被りです。「引き受けよう!」などという気負いはなくて、とに角やらなければということでやっている内に、色々な問題とぶつかったということです。長い間ライフ・ワークとしてきた『罪と罰』論と『カラマーゾフの兄弟』論を書き上げて、今改めて思うことは、結局自分が書いたものとは皆、教えていただいたものだということです。勿論自分の問題として取り組んではきたのですが、結局すべては「縁」というか、師やさまざまな方たちに背を押され、ドストエフスキイや聖書の世界へ、親鸞聖人の世界へと導かれていたのだと感じています。

大谷 ドストエフスキイに関わり始めてからのテーマだったという「死を超えた永遠の生命」、「復活」というテーマが先生にはおありだと思うのですが、現在そのテーマに対して、どのような感覚を持っておいでなのか、少しお話をいただけますか。

芦川 非常に難しいです・・・。私には「復活」ということが、単純に人間が元の生命の内に生まれ変わることだとか、蘇生し生き返ることだとは思えません。我々の生命はすでに永遠の内に摂取されてあるように感じます。ですから「死を超えた永遠の生命はあるのですか?ないのですか?」、このような問いに対しては、「そういう中に、我々はいると思います」とお答えするしかありません。

死んだ人と向き合う時、常に感じさせられることは、死というものは厳然としてあるということです。悲しみと共に、そこには大変な無・ニヒリズムがあります。しかし真直ぐに向き合う内に、その不吉で虚無的で懼ろしい感覚が決して最終的なものではなく、その奥からさらに深い厳粛で荘厳で神聖な何かがこちらに伝わってくることも事実です。それが「永遠」というものかと思います。言葉にできるのはこのくらいです。

忘れてならないことは、我々が生きるこの世界には人間の悪や罪の問題、ラスコーリニコフ やイワンが心を苦しめられた問題が今もなお数限りなく存在し、「行き場のない」人たちもまた 無数に存在するという事実です。この現実の中にも我々はいるのです。

大谷 「罪」ということを考える時、我々人間は殺生しないと生きてゆけない、煩悩からは離れられないという、「存在としての罪」というものがあると思うのですが、またその一方で我々には裏切るという罪もある、このように罪というものの内にある多面性を分けて考えなければいけないと思います。また罪と言っても、それは誰に対する罪なのかという問題もあると思うのですが、その辺をお伺いできればと・・・

芦川 ドストエフスキイは「罪」を大きく二つに分けて扱っていますね。一つは血の一線を踏み越える罪、つまりラスコーリニコフが老婆の頭を叩き割るというような「刑法上の犯罪」という意味での罪と、もう一つはアリョーシャが神体験にあたって感じたような、それに対して赦しを請うしかない、人間存在そのものが持つ罪、生きていること自体が持つ「形而上学的・宗教的な罪」という意味での罪です。

これら二つの罪感覚は共に、我々人間が非常に深いところに持つ根源的宗教感覚と言うべきもので、ドストエフスキイと親鸞聖人が響き合うのも、正にこの辺ではないかと思うのです。

ところでこの問題に関連して、目の前でお話するのも変なのですが、ここ一カ月私は本多先生がお書きになったものを幾つか読ませていただいて、不思議な親和感を覚えさせられています。それは先生が人間の「罪」と「救い」というものを非常に深いところで捉えられ、そこからものを語られ、文章を刻まれておいでだからだと考えていました。そして今日実際にお会いしても、同じものを感じさせられました。「罪」ということで、自分がドストエフスキイと聖書世界から学ばされた感覚を、本多先生を始めこちらにおいでの方たちは皆おもちであることを知って、私は心を動かされています。「罪感覚で結ばれたアト・ホームさ」というか、何か不思議な感覚を覚えさせられているのです・・・何か愛の告白のようになってしまいましたが、そういうのではなくて・・・(笑)。

司会 芦川先生からのラブ・コールがあったわけですが(笑)。二つの罪ということで、先生の今回の問題提起に繋がるテーマが出てきたと思います。つまり先に先生は、罪に対する裁きの感覚を強調されておいででした。罪に対する裁き、これは聖書世界では非常に大きな特徴と思われますが、ドストエフスキイでも例えばスメルジャコフの場合、自分の犯した罪を自己清算するという大変な形で出てきますね。またマタイ福音書のユダも首をくくるという形で、また使徒行伝ではアケルダマ(「血の地所」)で腸が飛び出して死ぬというような凄まじい「裁き」の在り方が見られます。先生のお話はその一方で、真宗においては罪に対する裁きとはどういう形があり得るのか、という問いであったと思います。罪と同じく裁きということも、人間が超越的なるものと如何に接するかという問題として、広い地平で考えられる気がします。先生の問いは、このような理解でよろしいでしょうか。

芦川 そうですね。特に旧約聖書で感じさせられるのですが、ユダヤ民族は神が「怒りと裁きの神」であるという強烈な感覚を、数千年の歴史の中で深く掘り下げたのですね。先のイザヤの場合もそうですが、その前に立つや、存在そのものが焼き尽くされ滅ぼし尽くされてしまうという「怒りと裁きの神」の感覚、それが同時に救いの感覚としてもあるというのは、深くて素晴らしい宗教感覚だと思います。この激しい裁きの感覚は洗礼者ヨハネからその弟子イエスへと、新約世界にも受け継がれてゆくのですが、親鸞聖人の世界においてはどうだろうとお伺いしたかったのです。ないとすれば、それもまた大事な特徴であり、この辺のことを是非お教

えいただきたいと思っておりました。

田村 「阿闍世のことを思い出します。父を殺して阿闍世は後悔します。しかし、取り巻きは、ただ「あなたは悪くありません」とばかり言いますが、阿闍世は満足できません。彼は一線を越えた、救われぬ「断善」の象徴としてあるのです。その一方で釈尊は、「私は阿闍世のために、涅槃に入らず」と言うところがあります。つまり釈尊は、裁きとは違う形で阿闍世に付き合うのですね。

もう一点、芦川先生の「ユダ的人間論」との関連では、釈尊を裏切った弟子として提婆達多がおりますね。教団をもっと良くしたいという思いから、彼は次第に教団の支配を狙い、釈尊の命を奪おうとしました。暗殺のために自分の爪に毒を塗っていたのですが、地獄の炎に焼かれながら地獄に落ちていったということです。これは悪人への裁きとして読み得るところでしょう。

ところが親鸞は「提婆尊者」という表現を採るのです。なぜ釈尊の命を奪おうとした提婆という人物を「尊者」とするのか、私はここが親鸞の仏教観の大事なところだと思うのです。親鸞からしてみれば、提婆という人物がいたからこそ、みんなが救われる、本当の教えが明らかになるという面がある。こう考えたのではないでしょうか。提婆達多は裁かれる対象としてだけではなく、救済の重要な契機として位置づけられるわけです。

芦川 西田先生は、神とは悪魔まで含んで初めて神なのだ、否定があって初めて全体が一つのリアリティになる、神になるのだとされますね。イワンの悪魔の否定の精神もそうですし、提婆達多の位置づけもそうなるのでしょう。この弁証法、逆説の論理はいいのですが、そこに裁きという要素がどう入るのか? 私は阿闍世の話では、彼の大変な罪深さが正面から問題とされるところが好きなのですが、彼の話に裁きという要素はあるのでしょうか? 釈尊が月愛三昧に入られ、その光で阿闍世の心は溶かされてゆき、栴檀の芳香が漂って来る、これは素晴らしい場面であり、正に西田先生の「内在的超越」現前の場だと思うのですが、ここで裁きという要素はどうなるのかと。提婆達多と阿闍世の話に、旧約的な裁きは関わるのでしょうか?

イワンのキリストは裏切りのユダたる大審問官に接吻をします。つまりイワンは「キリストの愛」を理解しているのですね。しかしこのような「愛と赦し」のイエス・キリストと同時に、師の洗礼者ョハネと同じ強烈な「怒りと裁き」の人イエスも存在するのです。先に『アンジャリ』で「ゲラサの豚群」について書かせていただきましたが、悪鬼たちを二千の豚群の中に追いやり、ゲラサの湖に沈めて絶滅させるイエスが表現するのは、旧約的な裁きそのものだと思います。この辺の終末論的裁きの感覚が親鸞聖人の世界でどう対応するのか、興味あるところです。今お話を伺っておりますと、親鸞聖人の世界は強烈な裁きの感覚とは違う世界なのかなという感じもしています。そしてこの違いがまた大事だとも思うのですが・・・

大谷 キリスト教だと、やはり世界を創造した神がいますから、裁けるのだと思うのです。仏教では、初めに仏ありではなくて、初めに法がある。その法というのは真理なわけで、創ったわけではない。だから裁けないのではないかと個人的には思うのですが。

芦川 そこは、納得し切れないところです。法とか真理とかいうものが裁きとしてあって、どうしていけないのでしょう? 究極は罪人が大慈大悲の中に摂取されるとしても、そこに彼に対する裁きという要素があっても、何らおかしくはないと思うのですが。

ルドルフ・オットーは人間の宗教感覚を徹底的に追求した人で、『聖なるもの』(1917)の中で人間に臨む超越感覚をまず「ヌミノーゼ」と表現し、さらにその要素を対照的な二つの感覚に分けます。心を惹きつけ、うっとりとさせる「魅するもの (ファスキナンス)」と、懼るべき怒りと裁きの感覚である「戦慄すべきもの (トレメンドゥム)」です。超越感覚の見事なとらえ方だと思います。ここから見る時、「母なる仏教」と「父なるキリスト教」というような二分法は表面的に思え、私は両宗教がそれぞれ二つの超越感覚を持つと考えたいのですが・・・

司会 先に引用されたイザヤ書のように、旧約的神認識とは「絶対的なるもの」がこちらを滅ぼしてくるぞという表明ですよね。今の先生の問題提起では、それが、真宗の文脈のどこに見出し得るかという問いとなるのでしょうか。

中村 真宗的視野から整理すると、他力に立った者が持つのは、罪が赦されるという感覚だけなのかということでしょう。私は決してそうではないと思います。弥陀に出会う前と出会った後でも、我々が「煩悩具足の凡夫」であるという現実自体は変わらない。けれども出会ったからこそ、自分の煩悩の恐ろしさというのを一層知らされる、赦されない罪があることをむしろ知らされてくるのであって、裁かれている感覚というか、赦されない存在であるということをむしろ知らされるというところが、他力の信なのではないかと、私は思っています。このような形でしか、今の問題提起には対応できないのかなと思いつつ聞いていました。

所長 芦川先生、ありがとうございました。幸いなことに親鸞というお名前を、先生からお聞きして、それが先生ご自身の出発点にあったということからお話に入っておりましたけれど、大体、平安から鎌倉にかけてのあの時期に親鸞という人が出たこと自身が、不思議なことだなと思うのです。あの時代にあれだけとにかく人間を深く見つめて、そして本当に人間がそのままゆるされるということを表現すると、やはりその時代を成り立たせている論理と矛盾するために弾圧される。そういう必然性は、イエスが十字架にかかるということと似たところがあるんじゃないかと思うのです。

親鸞が一番問題にしたのは、南無阿弥陀仏に相応できないという罪、つまり信心が真実と言えるかどうか、真実信心がいかにして成り立つか、そういうことを非常に問い詰めた。そのときに法然上人は意外と簡単に「南無阿弥陀仏と唱えていれば助かるよ」って言われたけれど、自分はそうなれないという暗闇が覆ってきて、どうしても明るみになれないという問題をずっと突き詰めていったのではないかと思うのですよね。それがいろんな意味で、非常に深く日本人の歴史の中に、人間を見つめることを教えてきた。

結局、近代に至って、人間一人一人が孤立しているようなこの現実の社会の中で、ぬくぬくとした共同体がないところで苦しむ中で、はじめて親鸞と対面するというようなことが出てきていますね。私が浄土教の歴史の中で画期的だと思ったのは、如来の第十八願の「至心信楽欲生我国乃至十念、若不生者不取正覚、唯除五逆誹謗正法」、この「唯除」が実は阿弥陀の深い配慮なのだということを、親鸞は明らかにしようとした。つまり法然上人は、釈尊の配慮だから、世にはいろんな人がいるから簡単に念仏だけ唱えたらいいと言ったのに、それでも自分をゆるしてしまって悪いことをしてしまうやつが出るといけないから、釈尊は「唯除」を置いた。親鸞自身は、これを真実信心を成り立たせるうえでの鍵概念として「信巻」で扱っている、そこに『涅槃経』からの阿闍世の引用が出てくるのですね。

阿闍世の救いという問題は、親殺しの五逆罪を犯した罪びとをゆるし得るかどうかという、 大変難しい問題です。慚愧する人間は、気づいた人間はゆるすという、そういう形で取り込ん でいくという形なのですけれど、どうも親鸞は、殺人した人はゆるさないよというのではなくて、自分自身がそういう存在だということをどこかで感じながら、あの問題を解釈しようとした。大乗であるからには、どれだけ罪びとであっても救わなきゃならないのに、提婆達多はゆるさないとか、阿闍世はゆるさないというようなことでは、大乗の理論としては成り立たんじゃないか。こういうことに対して、大乗の『涅槃経』が延々と阿闍世の救いを論じているわけですね。

そこに、仏教の中に大悲の本願が教えとして説き出されて、それが受け入れられてくるということについての、親鸞の了解が関わっている。そんなことで、「唯除」の中に出てくる親殺しの問題を、「信巻」の課題だとして親鸞は取り上げているわけですね。それは流布している『教行信証』にはないのですけれど、直筆の『教行信証』の坂東本には、表紙の裏側に大きな字で黒々と、本文と同じ字で親殺しのことが書かれてある。だから、信心を問いにするということは、自分がこういう身だということを自覚するということだよ、ということを親鸞自身が表現しているのではないかと私はいただいたのですね。

だから真実信心と簡単に言うけれど、我々はそれに背く存在だ、不実でしかない人間が、いかにして真実と関わり得るのかということを、どこまでも本願力回向と本願が教えてくれる。本願は無限なるもの、真実なるものが衆生を救うために立ち上がったということが、親鸞の理解ですから、あえて立ち上がって、言葉となって教えとなって説き出そうということに対して自分が本当に対応できるのか、こういうのが「如実修行相応」と、言葉となった名号と相応するということで、天親菩薩が言い、それを曇鸞が取り上げている。それを親鸞聖人は、徹底的に「信巻」一巻を通して、明らかにしようとされた。最終的に「自分はそれに出会うことができた」と宣言しながら、「悲しきかな愚禿鸞」と言われるわけですよ。あの悲しさは、真実になれない自分がどこまでも見えているという、そういう悲しさなのではないかなと思うのですね。だからそのことを先生は「裁き」という言葉でおっしゃるのかなというように感じながら、「裁き」っていうのはなんとなくやっぱり異質なのですよね。絶対なる者が「お前ら駄目だ」という言葉ですから、どうもそれは仏教の発想にはどこか抜けてくるというか、それはちょっと違うかなという感じもするのですけれどね。いかがでしょうか。

芦川 お話を感銘深くお伺いしました。親鸞聖人が自分の罪性を如何に深く感じたかというお話から、イワンのことを思いました。彼は法廷で自分が父親を殺したことを告白する時、そこの全員に向かって「お前たちも望んでいたのだ!」と叫びます。誰もが父親殺しを望んでいるのだと。イワンの父親殺し、神殺し、イエス磔殺、兄弟殺しとは、ドストエフスキイの人間観が突き詰められたもので、正に親鸞とドストエフスキイが重なるところだと感じさせられました。

「裁き」のことですが、私がこれにこだわるのは、「超越」がこちらに臨む時の感覚として、ユダヤの人たちによって非常に深く掘り下げられてきた感覚であり、我々が学ぶべき根源的な宗教感覚の一つがここにあると考えるからです。そういうものと親鸞聖人とが対応するところがあるのではないかと思っていましたが・・・ ないならば、むしろそのないところに親鸞聖人の特色とか素晴らしさがあるのではないかとも思います。これはなお考えてゆきたいテーマで、課題にさせて下さい。

司会 ありがとうございました。最後に、芦川先生の下でキリスト教哲学を研究しておられる 島田雄一郎さんに、今日は仙台からこの会に参加していただきましたので、一言いただけます か。 島田 私は芦川先生の許で学ばせていただいていて、「罪人の良心に怒りと裁きとして臨む神」という視点に慣れ親しんできました。今回のお話の中でこれと対比されて出てきた「どこまでも愛で包み込んでくる神」「内在的超越の神」がいるとしたら、どのような形で人間にその救いがもたらされるのかということに関心を持ちました。今後ドストエフスキイから学ばせていただき、また親鸞聖人から学ばせて頂く際の一つの視点として、この問いを自分の中に持ってゆきたいと思いました。本当にありがとうございました。

司会 ありがとうございます。最後に、芦川先生、今日の会について一言お願い致します。

芦川 前に皆さんに、私の研究室にこの日の打ち合わせに来ていただきました。私は普段人見知りをするほうなのですが、この時不思議な親和感を感じました。これは何だろうと思いました。私はあの時、「両者共に罪が深いから、通じ合うのでしょうかね」と冗談を言ってしまったのですが(笑)、今日、やはりそういうことかもしれないと感じさせられました。存在そのものが罪であり、自分こそが一番の罪人であるという認識を持つ者が、深くどこかで繋がり合うのだという・・・。改めて不思議な出会いの感覚を与えていただきました。ありがとうございました。

以上

註 本誌編集方針に基づき、本文中のお名前については、編集者手元にて肩書を付記。

[講師紹介は省略させて頂きました(芦川)]

[発言者] (肩書は当時のもの)

本多 弘之 (所長)

青柳 英司 (研究員)

長谷川琢哉 (研究員)

中村 怜太 (研究員)

田村 晃徳 (嘱託研究員)

法隆 誠幸 (嘱託研究員)

大谷 一郎 (嘱託研究員)

飯島 孝良 (嘱託研究員)

島田雄一郎 (東北大学大学院 文学研究科 専門研究員)

橘 秀憲 (事務長) 中津 功 (雇員)

[質疑応答 了]

《付記》

四年後、「質疑応答」を読み返して

芦川 進一

「現代と親鸞の研究会」から四年が経ちました。久しぶりにその記録を読み返してみて、私は「問題提起」の最初の部分で、聖書とドストエフスキイ世界について、いささか抽象的な「定義」から始めてしまったかなと思いました。ところが「質疑応答」は、司会者の巧みな交通整理もあり、熱気に溢れた充実したものになって、この記録を読み返すにつれて、あの時の雰囲気が再び鮮やかに蘇り、実に懐かしい思いに捉われたのでした。しかしこの《付記》では、あの会についての単なる「昔懐かし」的な回想を記すのではなく、将来両世界が更なる「相互理解」を推し進めるためにも、取り敢えず7つほど、今回考えたこと、課題と思われることを記しておこうと思います。それらについては、後に改めて正面から考察を試みるつもりです。

1. 「行き場のなさ」と「煩悩具足の凡夫」 — 信仰の原点 —

活気ある議論が始まる切掛けとなったのは、まずセンターの皆さんが揃って『罪と罰』のマルメラードフに強い関心を寄せられ、真摯に感想や質問をぶつけて下さったことだと思います。娘のソーニャを売春婦の身にまで追い込んでしまい、それでも足りないかのように、娘に酒代をせびりに行くマルメラードフ。この「甘ったれ」の卑劣漢は、ペテルブルクの酒場で「どこにも行き場がない」と呻きつつ、「最後の審判」の日、豚でしかない自分も再臨のキリストによって赦され、救われることを夢見ているのです。このマルメラードフを許し難い卑劣漢として嫌う人も多いのですが、前回も語ったように、私はこの男に石を投げ得る人間はいないと思います。

聖書学の荒井献先生が信仰の原点とされるマルメラードフ。研究員の皆さんが示された反応から分かるように、この男はそのまま親鸞世界の住人でもあり、「煩悩具足の凡夫」に他ならないと言えるでしょう。そもそもドストエフスキイも親鸞も共に、自らが「煩悩具足の凡夫」であり、「どこにも行き場がない」との痛切な自覚に立った人たちであり、キリスト教も浄土教も共に、これを人間存在についての認識の原点とし出発点として、そこから「超越」に向かう宗教なのだ — 私はこのことを当日ばかりか、今回も強く実感させられました。後の6でも記しますが、親鸞仏教センターの空間で、またそこに学ぶ方々との間に、私はいつも不思議な「アト・ホームさ」を感じさせられるのですが、その主な理由は、正にこの痛切な自覚と表裏一体の形としてあることを再認識させられました。これが今回「問題提起」に続いて「質疑応答」を読み返し、私が与えられた最初の大きな実感であり収穫でした。

2.「行き場のなさ」から向かう「天」と「地」 ― 原点からの思索 ―

次に関心を惹かれたのは、このマルメラードフ的「行き場のなさ」「煩悩具足の凡夫」という人間存在についての自覚から、これを原点とし出発点として、出席者の思索と議論が「天」と「地」との、相反する二つの方向に分かれてゆくように思えたことでした。

「煩悩具足の凡夫」の自覚が向かう「天」と「地」、二つの方向。これは大切なことで、しかも実に興味深いことですが、話が抽象的になる恐れがあるので、まずこれを更に別の言葉で言い表すように努めてみたいと思います。
一 前者は、人間は「煩悩具足の凡夫」であるがゆえにこそ、「超越者の救済の経綸」の内に摂取されているのだと捉え、まずは眼を「天」に向ける姿勢であり、翻ってここから、人間の「行き場のなさ」も「凡夫性」も「罪性」も、既に救済の「働き」の「契機」として位置づけられるとする考えです。他の一つは、逆に眼をひたすら「地」に向ける姿勢であり、「煩悩具足の凡夫」の「どこにも行き場のない」「どうしようもなさ」を原点とし、そこから更に否定の方向に認識を突き詰める姿勢、つまり人間は単なる「凡夫性」や「行き場のなさ」に留まるどころか、聖なる「超越者」をも否定し斥ける所まで行く悪魔的存在だとする考えです。

これを更に言い換えれば、キリスト教に於いては、前者は私が最初に提示した「キリスト論」的立場であり、後者は「ユダ的人間論」の立場だと言えるでしょう。浄土教に於いては、前者はまずは「煩悩具足の凡夫」に向けられた「弥陀の本願」の「ありがたさ」に焦点が絞られ、後者は我々「煩悩具足の凡夫」の「どうしようもなさ」にひたすら眼が向かう立場だとも言えるでしょう。

「超越者」の聖性とその救済の経綸を前面に押し出す立場に対して、「超越者」の愛と憐れみをも裏切る人間の悪魔性に強く焦点を絞る立場 ―― どの宗教においても、これら対照的な二つの立場、つまり「天と地」・「聖と俗」、或いは「光と闇」・「肯定と否定」の両極的認識構造が宗教の奥行きを深めて豊かにし、また複雑で困難なものにもしているのだと考えられます。そして我々は、とかくこれら二つの立場を互いに排他的なものとして捉えてしまい、どちらかの立場だけをより身近に親しく感じ、他方は遠ざけてしまいがちです。「聖と俗」・「天と地」の両極的認識から、それらのどちらかを排除する方向に向かうのでなく、両者を包み込んだ先にある「極性の弁証法」(南原実)へ ―― これが我々の現実の生も、そしてその生を基にする思索と認識も、共に向かうべき方向であり、真のリアリズムの立場だと言えるでしょう。

キリスト教に於いても浄土教に於いても、この辺の問題は最も本質的であると共に、扱うのが困難な問題に属するものと思われますが、四年前の「質疑応答」の場でも、出席者が恐らくはまだ互いに遠慮をし合い、この問題について議論を煮詰め切ることまではせずに終わってしまったように思います。特に「質疑応答」が始まって間もなく、マルメラードフが「救いを私有」しているのではないかとして、彼の救いに厳しい眼を向けられた青柳さんと、究極はユダにまで行き着くマルメラードフの罪性こそが救いの対象となるのだとする私との間になされた問答に於いては、二人の間に「ズレ」が生じたのでした。この「ズレ」については、上の「天と地」の両極的認識の問題を踏まえ、青柳さんが「弥陀の本願」の絶対性、つまりは「キリスト論」の立場で、私が「煩悩具足の凡夫」を突き詰めた「ユダ的人間論」の立場で、更に先にまで議論が煮詰められても良かったと思うのですが、私が中途半端な所で議論を収めてしまい、青柳さんも遠慮をされてしまったように思われ、申し訳なく思います。

しかし「どこにも行き場がない」「煩悩具足の凡夫」という共通認識が、このようにドストエフスキイと親鸞両世界に於いて、その人間観と世界観と超越観、そして救済観に関する両極的認識と議論を生む原点・出発点となり得るということ、このことを浮き彫りにすることが出来ただけでも、意味ある「質疑応答」だったのではないでしょうか。

この「問題提起」と「質疑応答」を、皆さんが「煩悩具足の凡夫」マルメラードフの 教いについて、自分自身の問題として考える参考として頂ければと思います。

3. ドストエフスキイ世界と「聖書」 ―「戸惑い」から「一歩」を踏み出すこと ―

ドストエフスキイとの取り組みにあたって、聖書をどう扱うべきかについて、センターの皆さんが私に質問されたことも、改めて印象深く読ませて頂きました。ドストエフスキイの文学世界が持つ「おもしろさ」を前にして、我々は更に聖書世界にまで踏み入ってゆき、キリスト教について理解する必要まであるのだろうか? —— この時皆さんは、私の試みに対して決して異議・異論を唱えようとしたのではなく、まずはドストエフスキイ文学を純然たる「文学作品」として、その「おもしろさ」を素直にエンジョイする可能性について問題を提起されたのでした。

これは尤もなことで、今まで私が繰り返しぶつけられた問いであり、私はこの場でも、ドストエフスキイ世界にアプローチする上での「絶対命法」などはないこと、ドストエフスキイが描き出す人間と世界の豊かさと広さには限りがないことを強調し(今も私は日々、そのことを実感させられています)、その良い例として、長い間ユニークな活動を続けてこられた「ドストエーフスキイの会」のこと、日々「ドストエーフスキイを生きる」メンバーの皆さんの多彩さを紹介させて頂きました。

しかし同時に、四年前も今回も私が感じたことは、センターの皆さんがこの質問をされた背後には、私への全面的な異議・異論ではないにしても、或る「戸惑い」のようなものが存在していたことは否定出来ないということです。つまり、たとえドストエフスキイ世界に大きな魅力を感じたとしても、ここから聖書へ、そして聖書からキリスト教へと、果てしなく広がって行くように思われる世界と、自分は何処まで付き合い得るのか、また付き合うべきかという「戸惑い」です。これは私自身も若い頃、ドストエフスキイ世界に足を踏み入れた時に、自分に与えられた時間や能力の限界を自覚するにつけ、強く感じさせられたことであり、この「研究会便り」でも繰り返し記してきたことです。

この「戸惑い」に対して、四年前の「質疑応答」の場でもお話をしたように、私は今もなお、親鸞と浄土教の世界に生きる若い人たちに、臆することなくドストエフスキイと共に聖書世界にも踏み込まれることをお勧めしたいと思っています(両世界の理解に於いて、「逆もまた真」であることは言うまでもありません)。このことを、今回は以下の二つの視点から記しておきたいと思います。

一つの視点は、親鸞仏教センターでお話をする機会を頂いてからの四年間、私がセンターの皆さんの活動に触れさせて頂くようになり、またあの日を契機として皆さんと研究会を開くようになったことで (→7)、私が身近に体験させて頂いたことを土台とするものです。

この間私は、センターの若い皆さんの熱心で真摯な研究の姿勢に驚かされ続けてきました。雑誌「現代と親鸞」を一読すれば明らかですが、皆さんは『教行信証』を始めとする親鸞の様々な著作は当然のこと、浄土教の根幹たる『観無量寿経』『阿弥陀経』『大無量寿経』などの浄土三部経や『涅槃経』を始めとする諸仏典、更には曇鸞や善鸞などの中国浄土教の高僧たちの著作や教えを弛まず学び続けるばかりか、明治以降の清沢満之を始めとする「近代教学」の先哲との取り組みも精力的に続けられていて、そこに示された「弥陀の本願」の真実を出来るだけ正確に理解し、受け止めようと努められておいでです。その「浄土教学」或いは「親鸞教学」は、キリスト教における中世以来の「神学」の伝統や、近代「聖書学」の伝統に負けぬ伝統を持つものだと言えるでしょう。

一方では「煩悩具足の凡夫」の痛切な自覚の上に立ち、他方では『教行信証』や『大無量寿経』などのこの上なく難解な古典・仏典とも取り組み続ける ―― 親鸞仏教センターの皆さんの姿勢は、この四年間、私の心を動かし、かつ励ましを与えて下さるもの

でした。このセンターの皆さんには、私がドストエフスキイとの取り組みから、更に眼を聖書世界に、そしてキリスト教世界にも向けたということは、決して異質なことでも、「戸惑い」で終わることでもないはずです。恐らく「戸惑い」の原因は、皆さんの学びの真摯さが、自らの専門に注ぐのと同じ時間と精力を、ドストエフスキイと聖書にも注がねばならないのだと思わせてしまうからでしょう。当日もお話をしたのですが、西田先生や小出先生が広く世界の思想・宗教・芸術に心を開かれ、ダイナミックに思索を続けられたように、皆さんもまずは「戸惑い」から離れ、大胆に「一歩」先に踏み出し、「六十歳までは基礎作業」のつもりで頑張り続けることによって、きっと新しい世界が開かれてくるに違いありません。殊にドストエフスキイからキリスト教を理解することは、親鸞から浄土教を理解することと重なることが実に多く、思索の種は次から次に生まれ出て尽きることはないでしょう。

もう一つの視点とは、私自身がこの半世紀にわたってこの内に感じ続けてきたもので す。少々卑俗な表現を用いますが、それは「視点」と言うよりは、あの「好きな人のこ とは何でも知りたくなる!」という「心理」と言うべきでしょう。つまりドストエフス キイに触れれば触れるほど、彼の世界が持つ芸術的・哲学的・宗教的奥行きと広がりは 果てしなく魅力的なものに思われてきて、その奥行きと広がりを十全に理解するために は、どうしてもまず彼自身が「命」とする聖書世界を知り、彼のキリスト教理解、殊に そのイエス像を知ることが必要である、そして知りたいと思わざるを得なくなるのです。 これに留まりません。ドストエフスキイという作家は更に我々読者に対して、彼が関 心を持つ他の偉大な先哲たちに対しても、どうしても眼と心を向けさせずにいなくさせ る魅力・魔力を持つのです。彼の内に燃える生命力と好奇心・探求心が、いつの間にか こちらにも乗り移って来ると言うべきでしょう。例えば文学者ではバルザックやディケ ンズやシェイクスピアやトルストイ、宗教の分野ではイエスは言うまでもなく、シリア の聖イサクやアッシジの聖フランシス、また芸術ではホルバインやラファエルの絵画や ベートーヴェンの音楽などにも、我々読者の眼と心は自然に引き付けられてゆくのです。 しかし私は、我々がこれら偉大な人物たちに関する「専門家」になる必要があるとまで は思いません。大切なことは「学問的専門性」とはまた別の、生命力と好奇心・探求心 に於いて妥協なく貪欲になることであり、ドストエフスキイに導かれて、これら先哲が 鋭く切り開いて見せる人間と世界の断面に眼と心を向け、人間と世界とその歴史の意味 の奥深さを知らされることで十分だと思うのです。以上のことは恐らくそのまま、皆さ んの親鸞に対する心理メカニズムと同じであり、十分にご理解頂けると思います。

大切なことは一人ひとりが自らの「専門」の、或いは「お気に入り」の壁の内に閉じ籠ることなく、「これは!」と思う他の分野・人物にもどんどん好奇心と探求心を働かせて挑んでゆくこと、意識的にその生命力を育んで行くこと、そして「一歩」先に踏み出すことだと思います。明治の開国以来一世紀半、既に親鸞が、そして浄土教が、様々な方の努力によって、世界に広く歩を進めつつあることは事実です。その流れの中で、ドストエフスキイとキリスト教世界とも正面から向き合い、両世界が互いを理解し合い、世界中に満ちる「どこにも行き場のない」「煩悩具足の凡夫」の心に語りかける真に力ある言葉を、互いに研ぎ澄ませ合うべき時が来ているのではないでしょうか。

4. 西田哲学、最後の論文が指し示すもの ― ドストエフスキイと親鸞への着目 ―

西田哲学が持つ意味の大きさについても、改めて痛感させられました。当日親鸞仏教 センターでも何度か言及をしたのですが、西田哲学最後の第七論文集「場所的論理と宗 教的世界観」では、旧約イザヤの神体験から始まり、最後は新約に於ける「内在的超越 のキリスト」「内在的なる絶対愛の神」という鍵概念が提示されるに至ります。これらは ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』との、また新旧約聖書との取り組みの中か ら導き出された決定的概念であり、更にここから親鸞世界・浄土教世界へと話が進めら れてゆきます。ドストエフスキイを学ぶ人間、そして親鸞を学ぶ人々にとっても、西田 哲学が最後に至ったこの認識を正面から受け止めることを避けてはならず、この思索の 道筋について学ぶことが不可欠であることを、私は今回も強く感じさせられました。

「研究会便り(18)」で述べたことも再度記しておきます。西田幾多郎・小出次雄・小 林秀雄、これら三人は生涯にわたり東西の思想・宗教・芸術に広く心を開き思索を重ね た人たちですが、彼らは太平洋戦争の末期、旧き日本が正に滅び去ろうとする時、期せ ずして『カラマーゾフの兄弟』と、聖書のイエスとその十字架に焦点を絞ったのでした (拙著『ゴルゴタへの道 ─ドストエフスキイと十人の日本人─』新教出版社、2011)。 殊に西田・小出師弟について言えば、二人はドストエフスキイと聖書、そして親鸞と浄 土教に導かれ、それぞれの「神」と「イエス」、そして「弥陀の本願」の「絶対のリア リティ」に行き着き、それと正面からの対決をしたと言えるでしょう。上の3で記した こととの関係でも、この事実にはドストエフスキイ研究会に属する人たちも、親鸞仏教 センターに属する人たちも共に、自らの「専門」の枠に縛られることなく、「一歩」を 踏み出し、今後の思索に於ける大きな導きの糸として欲しいと思います。少なくとも「場 所的論理と宗教的世界観」には、その難解さは大変ですが、西田哲学の極北に位置する 論文として喰いついてゆき、そこに記されたことの重大さと奥深さに触れるよう努める べきでしょう。「問題提起」でも言及しましたが、以前東京の親鸞仏教センターで研究 をされ、今は京都の教学研究所に所属される名和達宣さんは、親鸞の思想と共に、この 角度から西田哲学に研究の的を絞っておいでで、これらを学びつつ、バッハのマタイ受 難曲にも耳を傾ける若者です。このような研究者がセンターから次々に生まれ出ること を期待しています。

5.「救い」と「裁き」の問題 ―「裁き」のなさの独自性 ―

四年前、親鸞仏教センターに私が少なからぬ関心を持って臨んだテーマの一つは、「裁き」ということでした。この「裁き」のテーマは、旧約聖書の世界に於いて強く前面に打ち出されますが、新約の世界に於いても、イエスの師である洗礼者ョハネは強烈な旧約の預言者的「裁きの人」であり、その弟子イエスの内にも、一気に「罪」を断ち切る「力」、「裁き」の水脈が脈々と流れていることは明らかです。このイエスを裏切り、十字架上に追いやって逃げ去ってしまった弟子たちが、その後辿ったであろう「悪業への懲罰(カラ)」のドラマに於いて、彼らは果たして如何なる「裁き」と「赦し」の体験を与えられたのか? — 新約聖書が殆ど記すことのないこのドラマを、正面から繰り返し描いたのがドストエフスキイであり、彼の作品に於いてこの「ユダ的人間論」を「悪業への懲罰(カラ)」のドラマから明らかにすることが、今まで私の最大の課題の一つでした。

これに対して親鸞の世界、浄土教の世界に於いては、「煩悩具足の凡夫」或いは「罪

悪深重、煩悩熾盛の衆生」という人間観と共に、「弥陀の本願」と救いの絶対性との関係で、「裁き」の問題は果たしてどのような捉え方をされているのか? そもそも「父親殺し」の阿闍世や「釈迦殺害」を狙う提婆達多など、親鸞聖人が問題とする「五逆の罪人」の存在は、そのままドストエフスキイ的世界の住人そのものと言えるのではないか? この阿闍世と提婆達多は、イワンやスメルジャコフと共に、浄土教とキリスト教に於ける「罪と裁き」の問題を考える上で、最前線にいる人たちではないのか? ——これらのことが私の大きな関心の的でした。

この「罪と裁き」の問題については、最後に阿闍世と提婆達多を中心に、研究員の田村・大谷・中村さんが取り上げられ、本多所長からも感銘深い説明を与えて頂きました(このことは、改めて後述します)。しかし残念ながら時間が迫っていたこともあり、キリスト教と浄土教に於ける「罪と裁き」の問題は、「罪と赦し」「罪と救い」の問題と共に、この日は十分に議論され切らずに終わってしまった感があります(この問題と、その後に始まった新しい「研究会」のことは最後の7に記します)。

この日の討論から、殊に本多先生のお話からは、親鸞の世界と浄土教の世界に於いては、「超越者」からの厳しい「裁き」という面は余り前面には出されず、むしろ西田先生が記す「何処までも背く我々の自己を、逃げる我々の自己を、何処までも追い、これを包む」「弥陀の本願」の絶対性が前面に出され、浄土教信仰の不動の土台として据えられているように思われます。勿論これはまだ私の感想でしかありません。また本多先生が言われる、「弥陀の本願」に正面から応えきれない人間への「悲しみ」という問題も、「親鸞と裁き」の問題を考える上での大きな課題として自分には残されていると改めて感じました。

「質疑応答」の場で語ったことですが、そして今回も改めて思ったことですが、「裁き」の問題が前面に出されないということ、私はむしろここに浄土教と親鸞が掘り当てた宗教的感覚と認識の独自性、敢えて言えば凄さがあるのではないかとも思います。この問題は今も私の思索の大きな課題であり、是非皆さんにも考えて頂きたいところです。

ところで「質疑応答の」終わり近く、本多所長がお話されたことですが、先生が日頃お書きになる文章とは違い、切れ目なく訥々と畳みかけられるその語り口は、「罪悪深重の凡夫」たる人間に対する「弥陀の本願」のありがたさ、それと同時に阿闍世・提婆達多に代表される人間の底知れぬ罪性への悲しみ、またそれゆえにこそ人間に向けられた「弥陀の救い」の確かさについての、先生の幾重にもわたる思索と深い信が込められた、そして浄土教の歴史についての深い洞察に満ちた、他に類を見ないユニークな講話だと思います。浄土教の人間観、「弥陀の本願」、阿闍世や提婆達多の罪の問題、また親鸞の「唯除」の思想等に余り馴染みのない人には、最初はやや取り組み難い感じがするかもしれませんが、この味わい深いお話に繰り返し向き合われることをお勧めします。

6.「罪意識で結ばれたアト・ホームさ」 — 人間を結ぶ真の「絆」について —

当日も繰り返したことですが、私は研究員の皆さんが池袋の研究所を訪ねて下さった時も、湯島のセンターで本多所長に初めてお会いした時も、そして「現代と親鸞の研究会」での「問題提起」と「質疑応答」の間も、不思議な親近感を与えられたのでした。「罪意識で結ばれたアト・ホームさ」と表現をして、司会者から「ラブ・コールを頂きました」と見事に茶化されてしまいましたが(?)、その後研究員の皆さんとの間に開始され

た研究会で厳しい議論が続く間にも(→7)、私はこの「アト・ホームさ」を相変わらず感じさせられ続けています。互いに自らが「どこにも行き場のない」「罪悪深重の凡夫」であることを認め合い、その上で「超越」に向かうという姿勢が生み出す「アト・ホームさ」── 私はこれこそが、冒頭の1で記したように、マルメラードフを中心に当日の議論を熱気あるものにした源泉であると考え、またここに世の東西を超えて存在する根源的宗教感覚が活きて脈打つのを感じます。様々な人種や国籍や身分や年齢・性別を超えて、人間が真に結びつき合える「絆」とは、正にこのような所に見出されるのでしょう。

7. 新たに始まった研究会 ― 未来を宿す「種」として ―

このような背景の中で、「親鸞と現代の研究会」における私のお話を契機として、「ドストエフスキイと親鸞」という仮の名称の下に、自然に一つの研究会が始まり、コロナ禍という思わぬ障害もありますが、現在に至っていることも記しておきます。この研究会では、一方でドストエフスキイと聖書世界の問題について発表と討論が行われ、他方ではこれを受けて、親鸞と浄土教に関するポイントが発表され討論をされるというように、四年前の「問題提起」と「質疑応答」の作業が、改めてゆっくりと繰り返される形となっています。テキストとしては、主に『カラマーゾフの兄弟』と『教行信証』(そして『新約聖書』と『真宗聖典』)が用いられています。

「質疑応答」の最後近く、田村さんと本多先生が提示して下さった阿闍世の「父親殺し」や、「釈迦殺し」を図る提婆達多の罪の問題が、改めてイワンとスメルジャコフの「神否定」や「イエス磔殺」や「父親殺し」の問題と重ねて検討され、また阿闍世の「慙愧」とイワンやスメルジャコフの「悪業への懲罰(カラ)」とが較べられるなど、浄土教とキリスト教の核心をなす「罪」の問題が、これらの存在を通して繰り返し検討されつつあります。これら二つの宗教に於いて、イワンやスメルジャコフにせよ、阿闍世や提婆達多にせよ、「罪」と「罰」、或いは「裁き」と「赦し」と「救済」の問題が決して抽象的に提示されるのではなく、極めて具体的な人間的ドラマの形で示され、共にいわゆる「ユダ的人間論」に、更には「キリスト論」にまで煮詰められる可能性があるところに、メンバーは大きな興味を抱かされつつあります。

それと表裏一体の形で、「煩悩具足の凡夫」に対する「弥陀の本願」と救いが、また阿閣世に対する釈迦の「月愛三昧」が、キリスト教における救いの問題と、殊にイエスの十字架とどう対応するかについての検討も、少しずつですが試みられつつあり、更にはゾシマ長老が強調する、『カラマーゾフの兄弟』の核心をなす「実行的な愛」についての検討も始まりました。

取り組むべき多くの課題を前にして、今は何よりもまず全員が、ただ抽象的な宗教概念の検討に終わることなく、二つの世界の核心をなすと思われる問題を、それらが描かれる具体的なドラマの中で理解すべく、拙速は避けコツコツと基礎作業を続けている段階です。厳しく自由な雰囲気の下に進められるこの研究会については、いつの日か詳しい報告の機会もあるかと思います。

最後に、この地道な作業を大切とされ、常に真摯かつ熱心にテキストに向かい続けておられる若い皆さんに、私は改めて日本の将来に期待する心を与えられ、励まされていることを記しておきたいと思います。

(2021年3月)

次回「ドストエフスキイ研究会便り(21)」について

- ★次回は2014年12月20日、早稲田大学において 早稲田大学ロシア文学会の主催、早稲田大学ロシア研 究所・日本ロシア文学会共催の下になされた講演「ア リョーシャとイワンの聖書 — モスクワ時代、イエス 像構成の一断面 —」の記録を再掲載します。
- ★この記録は6年前、講演の直後に、この「研究会便り」 の第3回目に掲載されたのですが、今回の掲載では、 講演自体への加筆・修正はせず、それに対する付加的 な説明の部分を大幅に加筆・修正する予定です。
- ★この講演会は、ドストエフスキイ文学と取り組む際、 聖書が如何に大きな役割を果たしているかを知って 頂くため、『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャと イワン兄弟に即し、二人と聖書との関わりを具体的 に説明したものですが、前回、その記録を記す際、 講演の後に寄せられた様々な質問と、それに対する 私の回答・説明を付け加えることで、若い皆さんが 聖書世界にどのようにアプローチをしてゆけばよい のか、「入門書」的な講演記録を作成したのでした。
- ★今回は、更にその後私が若い人たちから受けた様々な質問や討論、また新たに加えた方が良いと思うに至った問題について記すことで、前回の「入門書」的な性格をより強めたものになる予定です。
- ★日本に於いて、ドストエフスキイ文学を理解する際、 他ならぬドストエフスキイ自身があれほど聖書に親 しんで、そこに記されるイエスに強く焦点を絞った 思索を展開しているにもかかわらず、聖書を遠ざけ る人が余りにも多いこと、日本人の精神の島国性は、 この「研究会便り」で繰り返し強調してきました。
- ★この「改訂版」によって、改めてドストエフスキイ 文学の世界に聖書世界が、またイエスという存在が 如何に強く活きて息づいているか知って頂き、更に この聖書世界にアプローチをする聖書学的方法につ いても知って頂ければと思います。またこの「研究 会便り」で繰り返し提示をして来た様々なテーマに ついても、再確認出来るようにしたいと思います。